

今月の主なニュース

「乳がん検診の県内の実施状況」と質疑応答
神奈川健康管理機関協議会
「治療と職業生活の両立支援」を考える
神奈川学校保健研究会9月例会
色覚特性について知っておくべきこと
川崎市医師会学校医部会副会長 辻 一夫
「保健室」
横須賀市立野比中学校 石渡 稚菜
ピンクリボンかながわ2017
あなたと、あなたの大切な人を、がんで失わないために…
わくわく健康講座
「早く歩くためのストレッチ講座」



第41回 予防医学実務研修会

対策型の乳がん検診の最近の動向と今後の方向性

視触診・マンモグラフィ・超音波検査・高濃度乳房への対応をめぐって



福田 護 先生

各市町村の保健担当者が、予防医学の見地から検診の重要性や健康寿命の延伸を考える第41回予防医学実務研修会（主催Ⅱ当協会、共催Ⅱ県都市衛生行政協議会、県町村保健衛生連絡協議会）が8月29日、神奈川中小企業センタービルで開かれた。今回は、聖マリアンナ医科大学附属研究所ブレスト&イメージング先端医療センター附属クリニックの福田護院長を講師に迎え、厚生労働省の「対策型乳がん検診の指針」をもとに、県内の各市町村の対応や対策型検診のあるべき姿、これからの課題をテーマにした。県内27市町からがん検診担当者や保健師など52人が参加。（2面に関連記事）

乳がん治療の進歩と乳がん検診
生涯に乳がんを患う日本人女性は11人に1人。今後は欧米並みにさらに増加が予測される。しかし、乳がん治療の進歩によって、10年生存率は全病期で見ても80・7%。ステージIで発見した場合、93・7%となり、不治の病ではなく、早期発見の意味は大きい。地域や職種で行われる対策型乳がん検診では、自覚症状がないうちに乳がんを発見す

上、医療費の削減などがあがる。こうした効果と無関係に行われる検診は、むしろ受診者に不利益を与えているに過ぎない（左下図）。マンモグラフィ検診による死亡率減少効果は、13年間観察した結果、40歳以上に行った検診の系統的解析

受診者の利益となる検診を行うために

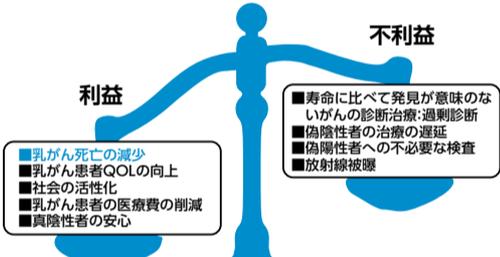
乳がん検診の死亡率減少効果
対策型の検診の効果として、その前提は「死亡率減少効果」が証明されていること。さらに乳がんによる死亡者の減少だけでなく、乳がん患者のQOLの向上

で乳がん死が20%減少するという効果が表れている。ただし、この効果を得るためには精度管理が必要である。一方、死亡率減少効果が証明されていない視触診については、単独では対策型検診の方法としては相応しくないといわれ、仮に実施する場合もマンモグラフィ検査と併せて実施することが厚生労働省の指針に明記

行政が関与するだけに、対策型乳がん検診は責任が大きい。検診精度が高くなるほど、その人の生命に影響しないがんの発見・診断が行われる傾向が近年見られる。がんを診断された時点からの余命よりも、そのがんによる症状が現れるまでの時間が長いがんを発見してしまうことは過剰診断である。この過剰診断のリスクをできるだけ少なくすることが求められている。

過剰診断をなくすためにも、乳がんの診断学を進展させ、治療すべき乳がんを治療しなくてよい乳がんを鑑別する必要がある。それに基づいた検診・診断方法を発展させなければならない。

乳がん検診の利益と不利益

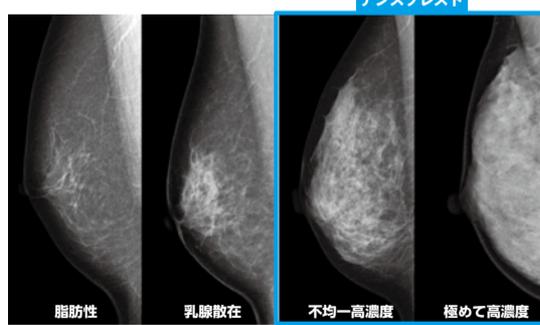


利益と不利益のバランスで利益が不利益を十分に上回らなければならない

皮膚や脂肪、乳腺組織から成り立つのが乳房。この乳房内の乳腺組織の割合を乳腺濃度といい、乳腺濃度が高い高濃度乳房（Ⅱデンズブレスト）の場合、マンモグラフィで撮ると、乳房内全体が白く映り、同様に白く映るがんを発見しにくい。乳房内の脂肪が少なく、乳腺組織の多い日本人は、高濃度乳房が多く見受けられ、がんを見逃される可能性が大きい。アメリカでは2009年、マンモグラフィ検査には、高濃

デンズブレストの問題

対策型検診にマンモグラフィ単独検査を導入した川崎市では、結果票に乳腺の評価欄を設け、「マンモグラフィでは全ての乳がんが発見できない。特に高濃度乳房の場合はその傾向が強く、精密検査を受診するように」との要旨を記載した。デンズブレストへの対策として、現在のスクリーニングフィルムマンモグラフィをデジタルマンモグラフィや3D画像として断層的な画像が見られるトモシンセシスを使った検診も検討される。どちらも乳がんの検出感度が高く、高濃度乳房の傾向が高い日本人女性の乳がん検診では有



脂肪性	乳腺散在	不均一高濃度	極めて高濃度
乳腺内ほとんど脂肪に置換	乳腺内の脂肪が70~90%程度	乳腺内の脂肪が40~50%程度	乳腺内の脂肪が10~20%程度
割合 4.7%	57.1%	36.1%	2.1%
低い	比較的中	比較的高	高い
比較的中	病変の見つけやすさ	比較的高	比較的中
少ない	日本人若い人	多い	多い
多い	欧米人高齢の人	少ない	少ない

マンモグラフィで撮影した乳房。白い部分が乳腺組織。高濃度乳房は右の2つの画像の状態

正しい知識と検診の大切さを伝える

2015年に発表されたJ-STARRTの論文で、超音波検査とマンモグラフィの併用は、マンモグラフィ単独検査に比べ、感度、がん発見率に優れると発表された。将来的に対策型検診として導入すること、導入の場合の課題などが検討されている。

過剰診断やデンズブレスト対策など、対策型検診の新たな課題は少なくない。がん治療の個別化と同様に、検診も受診者の年齢や乳房の構成によって個別化が進むことが予測される。乳がんに対して正しい知識を持ち、検診の大切さを伝える。ピンクリボンアドバイザーは、乳がんで亡くなる人を一人でも減らし、乳がんになった人に優しい社会を作るために今後必要とされる人材だ。